

# 沢山の問題・課題を乗り越え 24年産稲刈終了!

## 生産者通信

NPO法人  
米ニケーションセンター  
定価 100円(送料込)

朝晩はめっきり冷え込むようになって、ようやく秋本番を感じるようになりました。心配した台風も県内では、それほど大きな被害を受けてくれることなく過ぎ去ってくれたようです。猛暑の中での稲刈りでしたが、比較的晴天にも恵まれ、過ぎてしまえばマズマズの秋だったのではないのでしょうか。一部ではまだ刈取りの残っている所もあるようですが、ほぼ収穫も終わったと思われるので、各生産者の皆さんの収量と品質はいかがだったか気になるところです。



と発表されました。コシヒカリやこがねもちという、主力品種の品質が悪かったという残念な結果になってしまいました。登熟初期の高温による乳心白粒の発生に加えて、9月中旬のフェーン現象による胴割れ米の増加が品質低下に拍車をかけてしまったのでしよう。私自身も同様で、こしヒカリは全量1等、酒米は2等、コシヒカリは未だ受験していませんが、田場所によって収量に大きな差があっただけでなく、品質も1等と2等に分かれるでしょう。作

況104と言われても私自身としては、なかなか実感はわかないのが正直なところ。毎年それ程反収は多くはないのですが、先月も記させていたように、田の収量が極端に少なかったのです。原因は茎数不足です。有機も同様に茎数が少なかったのですが、ようやく反8俵になりました。ここ3年ほど有機の田以外でも同様の傾向が続いていますので、来年はこれまでの栽培方法を変えなければならぬと考えているところ。ポイントは、有効茎歩合をあまり落とさずに、出穂茎を増やすにはどうしたら良いかです。田植えの植え付け本数を増やす。坪当たり株数を増やす。元肥を増やす。出穂45日前後に追肥する。などを単独で、あるいは組合せてやってみたいと思っています。

とところで今年には稲刈後の水田や畦畔、農道の草が異常に繁茂しました。例年は稲刈り前に草刈りをやっていたのですが、今年はまだ放置しているの度草刈りをやらなくてはなりません。秋の草は春夏と違って蔓のものが多く、草刈り機に絡まって結構体力が必要。私の所はそれほどありませんが、近所には水田に短いヒエが穂をつけて、全体が紫色に染まっているところも見られます。最近の除草剤が原因か、今年の天候のせいかわりませんが、気になる場所です。

切機で反4本の排水溝をきりました。さすがに排藁が厚く山になっているところは発芽しませんでしたが、それ以外はどこでも結構発芽率が良く、すでに本葉2枚目が出はじめています。排水路も、雨が降っても湛水しないような水はけの良い所では必要がないかもしれない。雨が続きばダブダブと水が溜まってしまおうようなところでは排水溝は必須でしょう。私が子供の頃はレンゲソウの田も見ましたが、その後はまったく見かけていませんので手さぐり状態ではあります。



《裏面へ続く》

なぜレンゲソウかというところですが、「環境保全型農業直接支払交付金」との関係です。JAS認証水田は当然該当しますが、それ以外に「特別栽培」プラス「冬期湛水、カバークロップ・リビングマールチ・草生栽培」が対象活動になっていきます。冬季湛水は「降雪前の2か月間湛水すればいい」との話聞いたときに、私の悪い虫が目を覚ましてしまったのです。「2か月間湛水することだけでどんな意味があるのか」という疑問です。

レンゲソウを栽培するほうが緑肥になり花を楽しむこともできて、本来の趣旨に沿っているはずではないかと思っただけです。以前に岡山で見えたものは4〜50cmにもなっていました。子供の頃に見たこの地域のものは草丈が10cm程度の貧相なものでした。降雪地帯の宿命かも知れませんが、レンゲソウの鋤きこみによる文化に伴うワキの検討課題もあります。思いついたらやってみるしかありません。来春のレンゲソウの一面の花畑の出現を夢みて。

《内山常蔵記》

# 胴割れ多い新潟コシ

## 着色粒・シラタに加え 品質低下避けられず

24年産の新潟コシヒカリは、本紙既報の通り生産者の水・肥培管理や地域、圃場条件などによって品質差が大きくなっている。1等比率自体は猛暑に見舞われた22年産ほどは低くないが、2年前と比較しても「胴割れ」の発生度合いが高い傾向にあるという。産地関係者にとっては、価格面に加えて品質面での課題も抱えることになった。

JA幹部は「コシの品質低下は、手取りが増える」と思っていた農家も、

### 魚沼コシの1等比率55%

24年産の新潟コシヒカリは、本紙既報の通り生産者の水・肥培管理や地域、圃場条件などによって品質差が大きくなっている。1等比率自体は猛暑に見舞われた22年産ほどは低くないが、2年前と比較しても「胴割れ」の発生度合いが高い傾向にあるという。産地関係者にとっては、価格面に加えて品質面での課題も抱えることになった。

新潟県農産物検査協会(新潟市西区)はこのほど、9月末日現在における24年産米の検査結果をまとめた。加工用・備蓄米を含むうるち米の合計検査数量は23万2046ト(1等69.4%)。検査の進捗は6割程度だ。コシヒカリの合計数量は14万6869ト。前年同期より1万8000ト程度多い。等級は、1等62.7%、2等36.1%、3等1%、規格外0.2%。高温障害の影響などで、1等比率は前年同期より12%低くなった。地区別では、一般が64%なのに対して魚沼は55%に

24年産の新潟コシヒカリ検査結果

単位:数量ト、等級%

	検査数量	1等	2等	3等	規格外
合計	146,869	62.7	36.1	1.0	0.2
一般	117,628	64.3	34.6	0.9	0.1
魚沼	19,661	55.4	42.6	1.6	0.4
船橋	4,101	59.8	38.4	1.4	0.4
佐渡	5,480	56.3	42.1	1.4	0.2

(注)新潟県農産物検査協会の9月30日現在。

複数の関係者によると、9月末日段階でのコシの1等比率は長岡のJAなどでは8割に達しているが、全般的には5〜6割程度。魚沼地区内では、津南は7割程度あるものの、一部では5割まで届かない地域もある。落等要因のほとんどは着色粒、背白・腹白、基部未熟のほか、胴割れなど的高温障害だ。10月以降は刈り遅れ分の検査が増えてきている模様で、等級比率はさらに低下する懸念もある。

コシヒカリの合計数量は14万6869ト。前年同期より1万8000ト程度多い。等級は、1等62.7%、2等36.1%、3等1%、規格外0.2%。高温障害の影響などで、1等比率は前年同期より12%低くなった。地区別では、一般が64%なのに対して魚沼は55%に

**低電解質乾燥α化米の製造方法**

**特許を取得!**

岩井良行

2012年10月15日 商経アドバイス